

埼玉大学蔵『十八番歌合』——略解題・影印・釈文——

武井和
山本啓介

【略解題】

『十八番歌合』（仮称、以下本歌合）は、二〇一〇年七月、思文閣より埼玉大学が購入したものである。埼玉大学附属図書館における整理番号は「九一一・一…A、二一〇八〇一一五三」。

本歌合が所掲されたのは『思文閣古書資料目録 第二一八号「善本特集 第22輯」』（二〇一〇・七）である。以下、解説を全文引用する。

82 十八番歌合 一巻 八五〇、〇〇〇円

伝 姉小路濟繼并大館尚氏筆

文明十七年三月廿四日興行

二階堂政行・伊勢貞頼・姉小路基綱等十二名詠

寛永十一年古筆了佐極書

紙高31・7糎 長さ5米98糎 卷子装 箱入

本巻は、柔らかい楮紙の紙に書写された十八番歌合である。前欠で、二番目の左歌「ふるさとの人ハはなをやうらむらんなれぬる山の春の旅ねに」から始まる。

奥書に、「文明十七年三月廿四日尚氏張行之」とあり、文明

十七年（二四八五）に大館尚氏が興行したことが分かる。題は

「見山花、花随風、寄花恋」。作者は次第不同で、海住山大納

言、左兵衛督、左衛門大尉藤原（二階堂）政行、左衛門少尉平

（伊勢）貞頼、姉小路宰相（基綱）、沙弥宗伊、散位（明智）

頼連、散位宏行、修理亮藤原利慶、木阿、新藤中納言（高倉永

継）、兵庫頭尚氏の十二名である。張行者の大館尚氏は室町幕

府九代將軍足利義尚の御供衆であり、他の詠者も義尚と関わり

があることから、本歌合は義尚周辺で催されたものと思われる。

本巻の筆跡については、寛永十一年（一六三四）六月に古筆

了佐が「右一巻者姉小路濟繼卿御筆也、判之言葉書者大館兵部

頭尚氏筆蹟也」と極を記している。

書誌に関して、この解題に加ふべきものは少ない。出詠歌人、成
立事情等の細かな考証は別稿に譲るほかないが、二点現時点におけ
る推測を述べておく。

一、判者は「御判」とあるのみであるが、尚氏の立場を鑑みれば、
義尚と見ておくのが穏当であらう。

二、筆者は、いまのところ、以下のやうに考へてゐる。

和歌本文（含作者名・題・識語等）……………大館尚氏

判詞……………足利義尚？

ただし、尊経閣文庫蔵義尚自筆『常德院殿詠草』（国文学研究資料館蔵紙焼による）と比較する限りでは、自筆と断ずるにはやや憚られるといふべき筆蹟と感ぜられる。今後より多くの義尚自筆筆蹟資料と比較を加へより確実な推定に至りたい。

後者が正しいとすると、本歌合は原本と見做しうることになる。

本歌合は『国書総目録』『中世歌合伝本書目』『日本古典籍総合目録』等に未載の新資料、かつ、孤本。

【備考】

小論は、以下の共同研究による成果の一部を含む。

「古典籍の書写と書写環境の相関性に関する総合的研究」

（平成21年度・日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究

（B）、課題番号二二二二〇〇四六、研究代表者＝武井）

全冊のカラー画像は、学術情報発信システムSUCRA (http://sucra.satama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php?file_id=1861) に所掲されてゐる。

なほ積文作成に際して、石澤一志氏・浅田徹氏の教示を得た所がある。学恩に深く謝する。

【凡例】

一、上段に影印、下段に積文を配した。

一、影印掲載にあたり、以下の方針をとつた。

(1) 影印は、本文がある部分のみをトリミングし、空白部分は省略した。

(2) 紙数（紙継）は、当該紙最終行の後に、

第一紙

の如く示した。トリミングによつて、紙継部分が影印に存しない場合も同様であるが、その場合、影印には紙継箇所が掲出されてゐないので、注意されたい。

一、積文作成にあたり、以下の方針をとつた。

(1) 原則として、漢字は原本に近い字形とした。

(2) 和歌に通し番号を冠した。

(3) 積文作成上問題ありと判断された箇所には*を傍記し、当該行下等に注記を施した。

一、担当分担は以下の通りである。

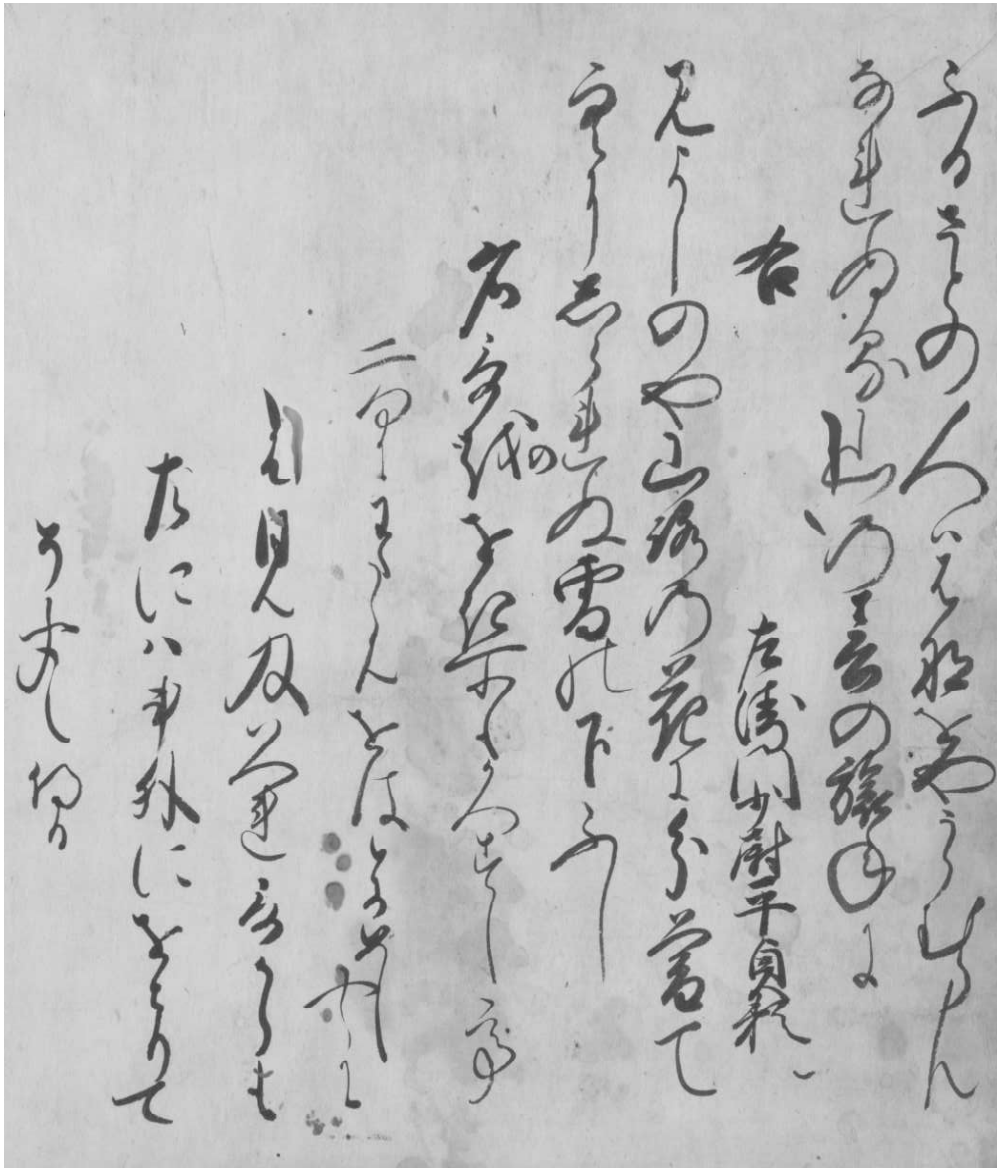
【原本調査】 武井。

【略 解 題】 武井が礎稿を作成し、山本が修訂した。

【備考・凡例】 武井。

【積 文】 武井が礎稿を作成し、山本が点検した。

【トリミング】 武井。*原本撮影＝株式会社・堀内カラー



*一番・二番左作者マデ闕、恐ラク一紙分ナラン
 1 ふるさとの人ハはなをやうらむらん
 なれぬる山の春の旅ねに

右 左衛門少尉平貞頼

2 みよしのや山路の花に分暮て

空にしられぬ雪の下ふし

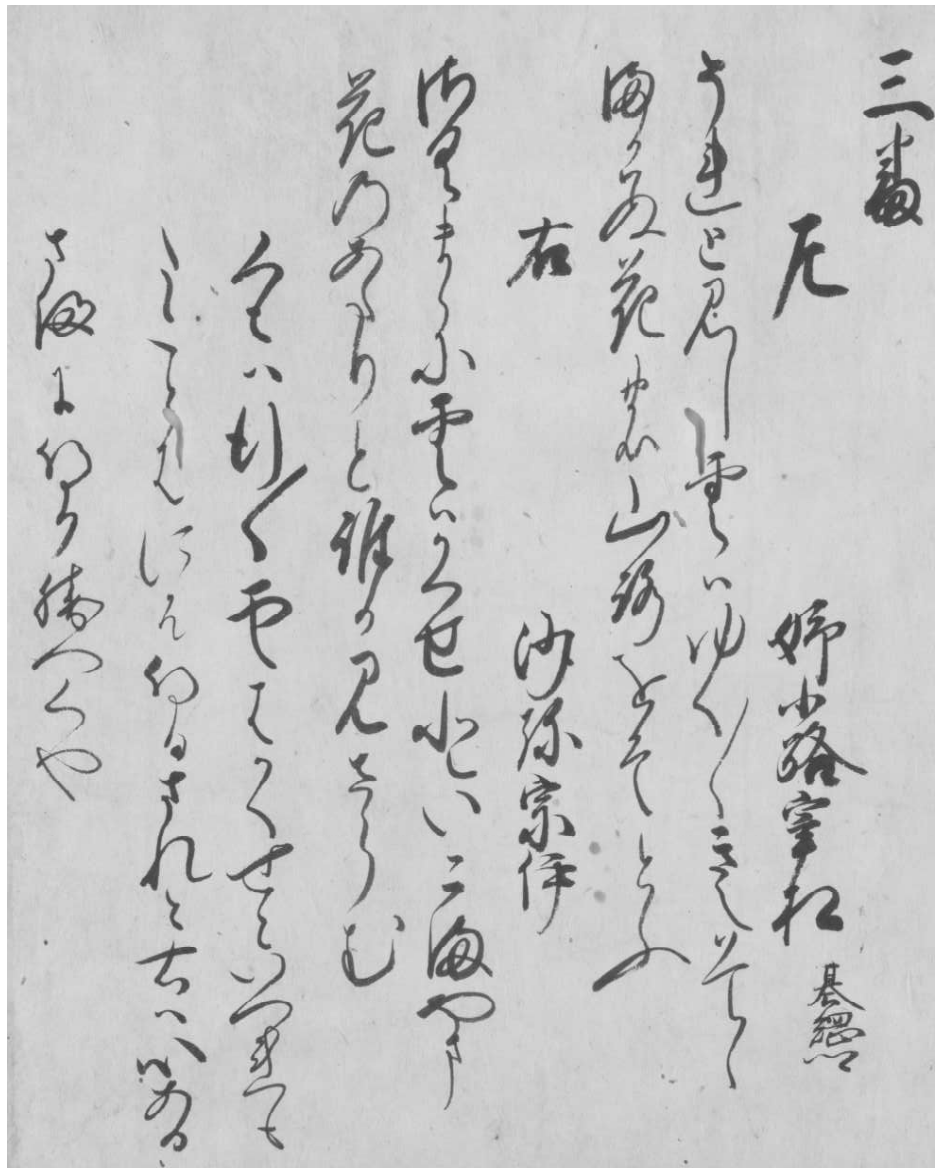
右哥ををき所もかへすして

二句にわたらんをはとかめしやうに

こそ見及ハへれ哥からも

左にハ事外にとりて

そ聞え侍る



三番

左 姉小路宰相基綱卿

3 それと見し雲ハゆく／＼きえハてゝ

まかハぬ花の山路をそとふ

右 沙弥宗伊

4 さくまゝに雲ハかくせといこまやま

花のあたりと誰か見さらむ

くもハ行／＼雲はかくせといつれも

たゝことはにそ侍るされと右ハ心ある

さまに侍り勝へくや

第一紙*

*現存第一紙ノ謂。本来ハ第二紙ナラン。

四番

左

散位頼連

あつちとつはらりみとて山さくら
世のあふねにかかりそめけむ

右

散位宏行

このまゝやとりとてまじ永日と
花にくらふの山のふもとに

聞よからすや心又ふるし

右又此まゝやといへるやもしも
さしつめたる様也なすらへて持
とす

四番

左 散位頼連

5 しら雲といつよりみえて山さくら
世のたかねにかかりそめけむ

右 散位宏行

6 このまゝやとりとはまし永日を
花にくらふの山のふもとに

よゝの高根は名所にてありとも
聞よからすや心又ふるし

右又此まゝやといへるやもしも
さしつめたる様也なすらへて持
とす

五番

左

修理亮藤原利慶

花なれやまかひし色は山かせに
きえゆく雲のあとのしら雲

右

木阿

よし野山花に入ぬるおりしもそ
やかに出しとおもひ成ぬる

ありたのいふこと
時とまこと
とくもりてさるれり又それ
とさる

五番

左 修理亮藤原利慶

7 花なれやまかひし色は山かせに

きえゆく雲のあとのしら雲 *雲不審、雪敷。

右 木阿

8 よし野山花に入ぬるおりしもそ

やかに出しとおもひ成ぬる

第二紙

両首左ハマことに行雲回雪の

躰を先とし右は。本哥の詞

をよくとりて思入られたり又いつれ

と定かたし

*を、「候」二重ネ書キサル

六番

左

新藤中納言 永継

まかひしもよそめなりけり分いれハ
雲ハくもなるやまさくらかな

右

兵庫頭尚氏

10分いりてくる山路もよしやた
花に旅ねの春の木のもと

左よく思よられたる姿にハへれと
なりけりといひてくもなると侍るハ

同心の病にや侍らんしからハ右を
勝とすへし

勝とすへし

六番

左 新藤中納言 永継卿

9まかひしもよそめなりけり分いれハ

雲ハくもなるやまさくらかな

右 兵庫頭尚氏

10分いりてくる山路もよしやた

花に旅ねの春の木のもと

左よく思よられたる姿にハへれと

なりけりといひてくもなると侍るハ

同心の病にや侍らんしからハ右を

勝とすへし

七番 花隨風

左

姉小路宰相

うらうらぬえはゆきりりごとまりぬ
花よりさうり花の木かけよ

右

宗伊

花もはやかせのうへなるちりくく小
ありかきためすにほふころかな

左右ともに上下かけあはぬやうに
聞え侍ゆうへに風の上なるといふ
言葉うつりあへぬ花のち草に
ミたれつゝかせのうへなる宮木の露と
侍る定家卿の名哥ありかならすしも
判詞にハいたし侍らねとかやうのことハ
哥合などにハしんしやくもありたくや侍らん

うらうらぬえはゆきりりごとまりぬ
花よりさうり花の木かけよ
判詞よつりあへぬ花のち草に
ミたれつゝかせのうへなる宮木の露と
侍る定家卿の名哥ありかならすしも
判詞にハいたし侍らねとかやうのことハ
哥合などにハしんしやくもありたくや侍らん

八寸

七番 花隨風

左 姉小路宰相

第三紙

11 うつろはぬころハひとりとまりぬ
かせにともなふ花の木かけに

右 宗伊

12 花もはやかせのうへなるちりくくに

ありかきためすにほふころかな

左右ともに上下かけあはぬやうに

聞え侍ゆうへに風の上なるといふ

言葉うつりあへぬ花のち草に

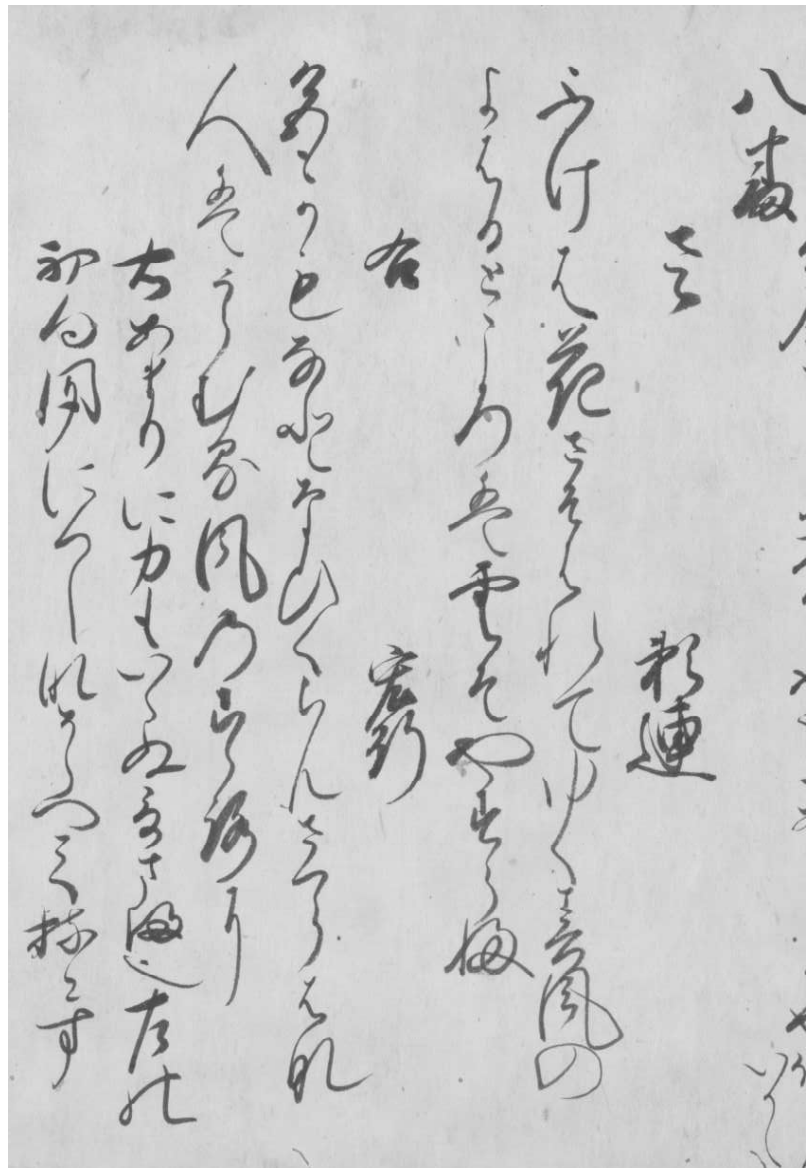
ミたれつゝかせのうへなる宮木の露と

侍る定家卿の名哥ありかならすしも

判詞にハいたし侍らねとかやうのことハ

哥合などにハしんしやくもありたくや侍らん

いか候?



八番

左 頼連

13 ふけは花さそはれてゆく春風の

よはるところは雲そやすらふ

右 宏行

14 色もかもなとなひくらんさくらはな

人はうらむる風のころに

右あまりに力もいらぬ哥さま也左の

初句聞にくしなそらへて持とす

第四紙

九番

右

新藤中納言

花はふくかせの
まゝのまゝの木すゑとそみる

右

尚氏

うき名のともしなさしのとさし
會たるやにや聞ゆる歟左ハ頓阿か
哥にかつちるもさかぬもあれとけふ
しこそなへてさくらの盛成けれと
侍れはこの哥隨風心にハ相違
せるをやいかゝ

會たりやにやあはれとさし
多にいらちるもさかぬもあれとけふ

しこそなへてさくらの盛成けれ

あはれとこは随風心にハ相違

せるをやいかゝ

あはれとこは随風心にハ相違

九番

左 新藤中納言

15 ひらくるもおつるも花ハふくかせの

こゝろのまゝの木すゑとそみる

右 尚氏

16 ひとりちることをうき名となさしとや

あらしハ花をなをさそふらん

うき名のともしなさしのとさし

會たるやにや聞ゆる歟左ハ頓阿か

哥にかつちるもさかぬもあれとけふ

しこそなへてさくらの盛成けれと

侍れはこの哥隨風心にハ相違

せるをやいかゝ

十番

左

藤原利慶

花さそふ山かせふけハしろたへの
こすゑにつく志賀のうら波

右

木阿

とて今袖にふきまく花ならば
雪とさうせ春のやまかせ

雪をめぐらせ春のやまかせ
めくらせと制したるも聞よからすや抄に
つくしかのうら波同類あるうへ宮内卿哥に
こき行舟のといへる名哥侍るにや凡それ
を花さそふとをきて末にしかのうら波とをかれ
たりひらの山風の同類とも申ぬへくや

十番

左 藤原利慶

17 花さそふ山かせふけハしろたへの

こすゑにつく志賀のうら波

右 木阿

18 とて今袖にふきまく花ならば

第五紙

雪をめぐらせ春のやまかせ

めくらせと制したるも聞よからすや抄に

つくしかのうら波同類あるうへ宮内卿哥に

こき行舟のといへる名哥侍るにや凡それ

を花さそふとをきて末にしかのうら波とをかれ

たりひらの山風の同類とも申ぬへくや

十一番

左

海住山大納言

さそひくる匂ひのちもちりゆけハ
二たひ風にまよふ花かな

右

左兵衛督

ふるの中空ハすこふる荒涼なるうへ行
さくら哉とハいかなる事にか左もよろし

からねと風をしるへよりハさそひくる匂ハ
立まさりてや侍らん勝へし

さそひくる匂ひのちもちりゆけハ
二たひ風にまよふ花かな
さそひくる匂ひのちもちりゆけハ
二たひ風にまよふ花かな

十一番

左 海住山大納言

19 さそひくる匂ひのちもちりゆけハ

二たひ風にまよふ花かな

右 左兵衛督

20 道もせに雪かとふるの中空も

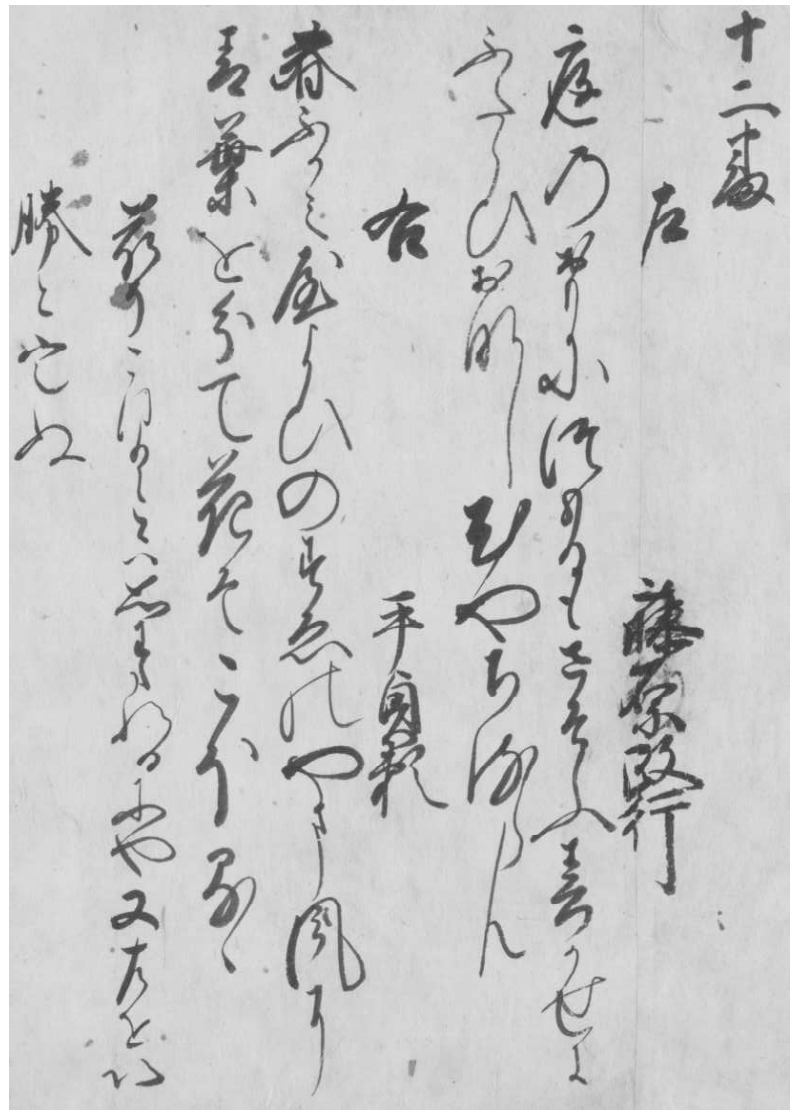
風をしるへに行さくらかな

ふるの中空ハすこふる荒涼なるうへ行

さくら哉とハいかなる事にか左もよろし

からねと風をしるへよりハさそひくる匂ハ

立まさりてや侍らん勝へし



十二番

左 藤原政行 *藤原、擦消ニテ書カル。元字不明。

第六紙

21 庭のおもにつもるもさそふ春かせに

ふたゝひおなし花やちるらん

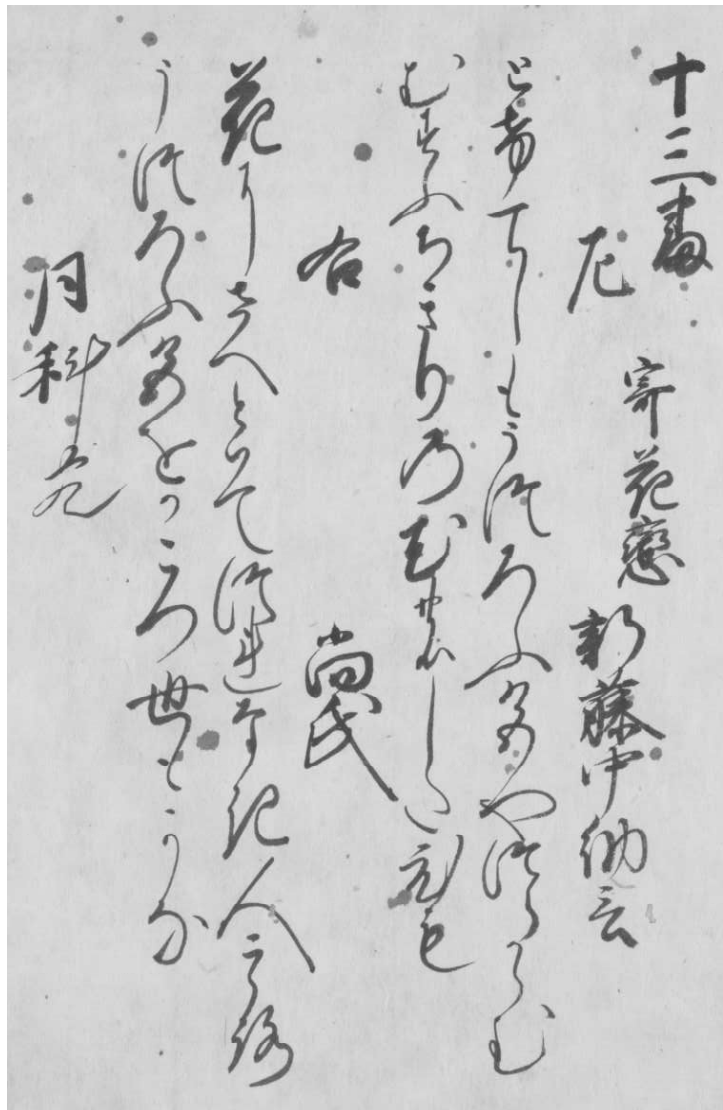
右 平貞頼

22 春ふかみやよひのすゑのやま風に

青葉を分て花そこほるゝ

花そこほるゝとハ思わたれるにや又左を以

勝と定ぬ



十三番

寄花戀

左 新藤中納言

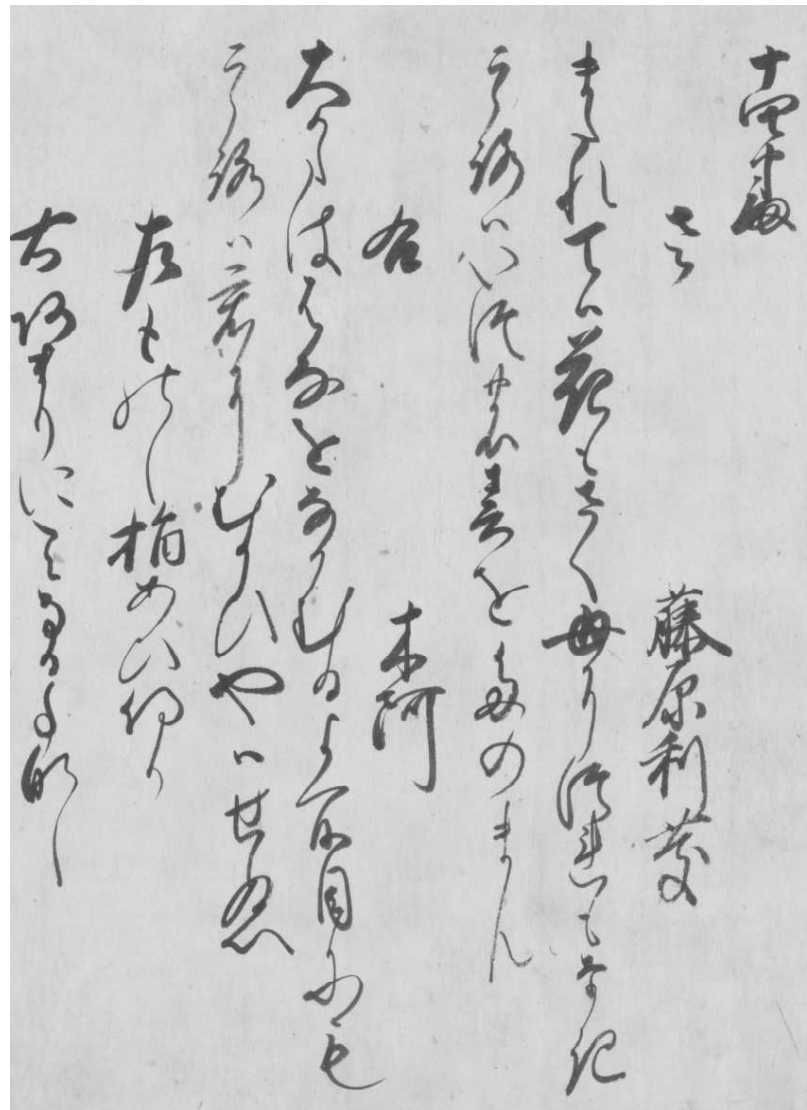
23 とけてしもうつろふ色やつらからむ
 むすふちきりの花のしたひも

右 尚氏

24 花にさへとはてつれなき人こゝろ
 うつろふ色をかこつ世もかな

同科候敷

第七紙



十四番

左 藤原利慶

25 またたれてハ花もさく世につれもなき

こゝろハいつの春をたのまん

右 木阿

26 大かたははなをなかむるよそ目にも

こゝろハ君にむかひやハせぬ

左ものし指あひ侍り

右あまりにことなる事なし

十五番

左

藤原政行

我にうきこゝろの色のたくひまで
みえてうつろふ花もうらめし

右

平貞頼

はなのいろもあたにうつろふ人こゝろ
ちきりしすゑにかせやふくらん

契りし末に風や吹らん無下に思
入たる方なしたくひまで見えてきゝに
身の夕暮にくも消てなへての春へといへる哥も侍れと
くし。せめて右の勝敷

十五番

左 藤原政行 *藤原、擦消ニテ書カル。元字不明。

27 我にうきこゝろの色のたくひまで

みえてうつろふ花もうらめし

右 平貞頼

28 はなのいろもあたにうつろふ人こゝろ

第八紙

ちきりしすゑにかせやふくらん

契りし末に風や吹らん無下に思

入たる方なしたくひまで見えてきゝに

身の夕暮にくも消てなへての春へといへる哥も侍れと
くし。せめて右の勝敷

十六番

右

海住山大納言

花の枝にむすひし文にうき船の
うき名は世にそちりはしめける

右

左兵衛督

左ハかの隨身につたへける文の心にや
ある由申けれと千五百番事命にもある

左ハかの隨身につたへける文の心にや

ある由申けれと千五百番事命にもある

心ちし侍れハさのミ申に及侍らす

左哥ともに哥からよろしからねは持

なとにや

なとにや

十六番

左 海住山大納言

29 花の枝にむすひし文にうき船の
うき名は世にそちりはしめける

右 左兵衛督

30 はなど見る人に涙はつゝめとも
こほれて袖の色やしられん

左ハかの隨身につたへける文の心にや

哥合には物語の心をハよまぬ事にて

ある由申けれと千五百番事命にもある

心ちし侍れハさのミ申に及侍らす

左哥ともに哥からよろしからねは持

なとにや

十七番

右

頼連

まつ人のたよりふ花はほへとも
袖ひかれくる夕くれもなし

右

宏行

いたつらに待夜なからのきぬくや
たちもわかぬ花のよこ雲

立も別ぬ花のよこくもハさもありぬ

へし上句凡て心えかたし左ハ

ハなといふ字までにて題の心をふく

めり無念にや侍らん

十七番

第九紙

左 頼連

31まつ人のたよりに花ハにほへとも
袖ひかれくる夕くれもなし

右 宏行

32いたつらに待夜なからのきぬくや
たちもわかぬ花のよこ雲

立も別ぬ花のよこくもハさもありぬ

へし上句凡て心えかたし左ハ

ハなといふ字までにて題の心をふく
めり無念にや侍らん

十八番

姉小路宰相

由きり風と成守のちきりかな
人あはれとむとくしり

右

宗伊

笑うけりうろのちきりとるに
ゆきあはれ春のちきり

両首右者为先義理難捨

右輪五句相應下句尚ハ殊勝

十八番

左 姉小路宰相

33 雨となり風と成けるちきりかな

人のこゝろを花とみしより

右 宗伊

34 色かはるこゝろのたねかとはかりに*

さもあらぬ春のはなもうらめし

両首左者为先義理難捨

右輪五句相應下句尚以殊勝

*はかり、擦消跡アリ

第十紙

見山花 花隨風 寄花戀
 題
 作者 次第不同
 海住山大納言 左兵衛督
 左衛門大尉藤原政行 左衛門少尉平貞頼
 姉小路宰相 沙弥宗伊
 散位頼連 散位宏行
 修理亮藤原利慶 木阿
 新藤中納言 兵庫頭尚氏
 新藤中納言 兵庫頭尚氏

題

見山花 花隨風 寄花戀

作者 次第不同

海住山大納言

左兵衛督

左衛門大尉藤原政行

左衛門少尉平貞頼

姉小路宰相

沙弥宗伊

散位頼連

散位宏行

修理亮藤原利慶

木阿

新藤中納言

兵庫頭尚氏

*藤原、擦消ニテ書カル。元字不明。

講師

讀師

判者

御判也

文明十七年三月廿四日

尚氏張行之

右一卷所書者姉小路殿濟繼卿御筆也

判之言葉書者大館兵庫頭尚氏筆蹟也

寬永十一年

六月中旬

古筆
了佐

講師

第十一紙

讀師

判者御判也

文明十七年三月廿四日 尚氏張行之

第十二紙

* 右一卷所書者 姉小路殿濟繼卿御筆也

判之言葉書者大館兵庫頭尚氏筆蹟也

寬永十一年

六月中旬

古筆 (印「琴山」)

了佐 (花押)

* 以下古筆了佐筆、料紙ハ寬永時ノモノナラン。

頁	行数等	誤	正
P 15	判詞三行目	候て見及いつれ	こそ見及ハへれ
P 16	三番右歌 判詞二行目	誰か見らさむ ことほに候て侍る	誰か見さらむ ことほにそ侍る
P 20	判詞末	侍らん	侍らんいかゝ
P 22	判詞二行目	會たるやうにや聞ゆらんさらハ	會たるやに聞ゆらん左ハ
P 24	判詞三行目	さそひくる句ハ	さそひくる句ハ
P 26	判詞二行目	同科敷	同科敷 *「敷」、存疑

※正誤表作成に際し、浅田徹氏より多くの教示を得た。学恩に謝する次第である。